

エッセイ

— 私の文学館散歩 (五) —

天城峠を巡る散歩と考察そして峠の道草

松村 茂治

ひなびた温泉宿

踊子が越えたという旧天城隧道を越えてみたいと思うようになったのは、いつのことだったろう。小説を読み、映画を見てのことだったから、半世紀も前のことになるだろうか。そうした思いを抱いてから、何度か伊豆を旅することはあったが、旧道に脚を踏み入れる機会はなかった。いつも人と一緒だったので、こちらの都合に巻き込まれわけにはいかなかったし、さりとて、同行者を近くに待たせておいて、自分だけ一人で寄ってみるというわけにもいかなかったからだ。今回の伊豆行きは、露天風呂に浸ったり、金目鯛を味わったりすることが目的ではなく(結果的にそ

ういう事態になれば、それを受け入れないわけではないが)、「踊子」の足跡を追うことが最大の目的なのである。

「踊子」の足跡を追う旅ということは、宿泊先は湯ヶ野でなければならなかった。川端が「伊豆の踊子」を執筆したのが湯ヶ島の宿だったということ、そして、その宿は、「川端の宿」として売り出していること、さらに、川端自身が、彼に続いて何人も文人が湯ヶ島に逗留したことを称して「湯ヶ島文学は、私の手柄」と言っていることもあり、湯ヶ島の方がつとに有名だが(後述のように、そのために間違いも起きるわけだが)、学生さんと踊り子たち旅

芸人の一行が泊まったのは、そしてあの印象的なシーンがあったのは、湯ヶ野だったことを忘れてはならない。

できることなら、学生さんが利用した湯ヶ野の福田屋に泊まりたかったのだが、予約の電話を入れてみると、こちらが予定している日は満室ということだった。福田屋が無理ならばしかたがない、川を挟んで対岸にあるひなびた温泉宿しか選択肢はない。

家を出たのが昼過ぎだったということもあり、湯ヶ野に着いたときには、辺りは暗くなりかけていた。五月半ばのことだった。いつの頃からか、雨も降り始めていたので、どこにも出かけず、湯に浸かって部屋に戻り、夕食の支度が整うのを待っていた。

部屋の窓から対岸の福田家の方に目をやると、玄関前に団体客が到着したのが見え、満室の理由はこれだったのかと納得したのだった。伊豆のこんな山の奥にまで、外国人の団体旅行客が来るのかと思ったが、この一団が、私と全く関係のない集団ではなかったということが、翌日、天城峠の近くまで行って明らかになるのである。

窓から何度も身を乗り出すようにして、眼下の川岸を眺めながら、あの印象的なシーンはどこだったのだろうか、あるとすれば、福田家から目の届く所だから、私の眼下あた

りのはずだが・・・それらしい場所がないということは、伊豆は雨の多いところなので、川の氾濫で岸辺の温泉は流されてしまったということなのかもしれないと思ったりしていた。

「伊豆の踊子」に、こんな場面が描かれているのである。湯ヶ野に泊まった翌朝、主人公の学生さんは、同宿の男に誘われて朝風呂に入るのだが・・・

「向うのお湯にあいつら(踊り子たち旅芸人の一行)が来ています。ほれ、こちらを見つけたと見えて笑ってるやがる。」

彼に指さされて、私は川向こうの共同湯の方を見た。

湯気の中に七八人の裸体がぼんやり浮かんでゐた。仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出してきたかと思ふと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りさうな恰好で立ち、両手を一ぱいに伸ばして何かを叫んでゐる。手拭いもない真裸だ。それが踊り子だった。

「伊豆の踊子」は、高校の現代国語の教科書で読んだのが初めてだったが、この川辺のシーンは、割愛されていたのではないだろうか。こんなきわどいシーンがあったら、

大騒ぎ間違いないところだが、授業中、そういう騒ぎはなかった。いや、高校生とはいえ、当時は、今とは比べものにならないくらい誰もが初心^{はつこ}で、しかも男女共学だったので、授業中こんなところに遭遇したら、大騒ぎとは反対に、誰も言葉を発することができず、クラスの中に、気まづい雰囲気は漂って、教師も生徒もその始末に困ったのではないかと思うのだが、そういうこともなかった。

踊子の時代、旅芸人たちは、川辺の共同湯を使っていたらしく、その一部は露天風呂にでもなっていたのだろう、ずいぶんとあけすけだったようだ。しかしながら、よく目を凝らして見ても、現在の川筋には、それらしき浴場は見当たらない。私の泊まっていた宿に隣接して、地元住民の使える共同浴場があった。そこなら、福田屋からは目と鼻の先なので、先のシーンも不可能ではない。私たちがこちらの宿に入ったとき、その共同湯の前のベンチに、数人の地元のお女たちが腰掛けて、話し込んでいるのに出くわした。これから皆で湯に入るのだということだった。現在の共同湯からは、直接川へは出られない造りになっているので、残念ながらと言ったらいいのか、幸いにしてと言った方がいいのか、お女たちが踊子の真似をすることは、無理をすれば出来なくはないが、一応不可能な状況になっている。

出だつたと、女将は懐かしそうに話してくれた。私は、山口百恵の踊子は一部しか見ていないが、全体を見れば、どのシーンでこの宿が使われたのか、分かるのかもしれない。

天城峠で会った日は・・・

翌朝、天城隧道に向かう前に、福田屋の脇にある文学碑を見に行くことにした。河津川に架かる小橋を渡って（山口百恵の踊子も、踊りながらこの橋を渡っていた！）福田屋の前までやって来たとき、玄関前に東京にある国立大学附属中学校の生徒たちを歓迎する看板が掲げられているのが目に留まった。前の日に到着したのは外国人団体客ではなく、日本の中学生たちだったのだ。彼らはもう出かけてしまつたらしく、宿の周囲はひっそりとしていた。

文学碑に刻まれていたのは、「道がつづら折りになつて・・・」という、かの有名な冒頭の一節ではなく、踊子たちが、隧道を過ぎて湯ヶ野に向かう一節で、この場に最も相応しい部分選ばれたのだろう。

隧道に向かう前に立ち寄った「伊豆近代文学博物館」で、思わぬ出会いがあった。正確に言うとう、立ち寄ったのは、「道の駅・天城越え」の方で、当初、隣接する博物館に寄るつもりはなく、この後の隧道までの山歩きに備え、小休

だから、食事を運んでくれた女将に、「踊り子たちが泊まったのは、この宿だったのでしようか」と尋ねたのである。女将からは、「この宿ではありません」という答えが返ってきた。私の気のせいかもしれないが、その答え方が、つっけんどんというほどではないにしても、毅然とした響きを持つていたように感じられた。作品には、踊り子たちの通る街道沿いの村々の入り口には、「物乞ひ旅芸人村に入るべからず」という立て札が掲げられていたとある。女将の言葉には、うちはそういう人たちが利用する宿ではありませんと宣言したいニュアンスがあったように感じられたのだ。

投宿した宿の玄関を入ったところに、数枚の色紙と写真が飾られていた。よく見ると、写真は山口百恵が踊り子を演じたときのロケ中のスナップ写真であり、隣に飾られていた色紙には、この宿の湯船に浸る踊り子、そして宿の入り口に腰掛け、対岸の宿の方を見つめている踊り子の姿が描かれていた。それは、踊り子がこの宿に泊まったような印象を与えるものだったこともあって、先ほどの質問をしたのである。ただし、女将が言うには、映画にはこの宿も使われたとのことであった。当時、人気絶頂の山口百恵主演ということもあり、深夜の撮影にも拘わらず、大勢の人

止をするのが目的だったのである。コーヒーでも飲もうと店を探していると、私の歩いているすぐ近くに大型バスが止まった。よく見ると、フロントガラスには、朝、福田屋の玄関先で見てきた、某国立大学附属中学校の名前が掲げられていた。福田家に泊まっていた中学生を乗せてきたものと思われたが、そのバスに知っている人が乗っていると、このときはまだ分からなかった。

文学博物館にはどんなものが展示されているのか知らなかったもので、入り口付近でうろろうしながら入ろうかどうか迷っていると、中学生たちの入館手続きを済ませた引率教員と思われる男性が、私の脇を通り過ぎていった。すれ違ったときには俯いていたので、はっきりとは見えなかったが、その横顔に見覚えがあった・・・というより、バスのフロントガラスにあったプレートの学校名が媒介となつて、一足飛びに彼を思い出させたと言っている。

行き先を目で追っていると、ガラス戸の向こうへ入って行ったが、じきに戻って来そうに見えたので、しばらくそこに留まっついて、戻って来た彼に、「人違いだったらすみません、もしかすると・・・」と、恐る恐る声をかけたのだ。すると、こちらが確認するよりも一瞬早く、先方から私の名前を呼ばれ、見覚えが間違いないことが

分かったのだった。

彼は、二十年ほど前、私が役職で校長をしていた学校の国語の教員で、私の在任中に現在の学校に異動したのだった。前の晩、福田家に泊まれなかったことを伝えると、それは申し訳ないことをしたという詫びの言葉と共に、これは文学に興味のある生徒たちを対象にして何年も前から実施している校外学習で、この時期には宿を貸し切りにもらっているのです、他の宿泊希望者には迷惑をかけているとのことだった。彼の勧めもあり、博物館に入ることに決めて、中学生の後を追うように、川端康成、井上靖など、伊豆に関わりのある文学者にまつわる記念の品を見て回ったのである。

館内を一回りして出てくると、彼は、レポートをまとめるための指導をしている最中だった。当方は、これから隧道に向かう旨を告げて、そこを後にしたのだった。

難しい日本語

隧道まで車で登り、そのまま向こう側へ通り抜けることも可能だが、せめて旧道部分くらいは歩くべきだろう。雨模様なので傘が手放せないのは少々厄介だが、我が学生さんも、麓から追ってくる雨脚に追われて天城越えだった

のだから。

歩き始めて間もなく、なぜこんな斜面に・・・と思うような所に「川端康成文学碑」が建っていた。そこには、川端の肖像レリーフ（私には、あまり似ているようには見えなかったが）とあの有名な冒頭の一節が彫られていた。

道がつづら折りになつて①、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃②、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじいはやきで麓から私を追つてきた③。（傍線、丸数字は筆者による）

冒頭のこの一節はあまりにも有名で、何度も読み返してきたこともあり、空で言えるほどになっているが、これが厄介な一文であるということは、比較的最近になって知った。

特に難しい言葉はないし、映画でもお馴染みのシーンということもあつて、何の苦勞もなくはつきりと情景を思い浮かべることができるので、その曲者ぶりを深く考えることはなかった。見事な書き出しではあるが、一筋縄ではないかないということを、中条省平氏が以下のように指摘している。

では「（私が）そのつづら折りをたどつて天城峠に近づくと・・・」となるのではないか。しかも、（私が）と挿入したとおり、中条氏の指摘によれば、②では巧に主語である「私」が省略されているというのである。

中条氏はこの文を称して、これは「日本語の達人」の文章で、「見事に典型的な日本語の小説の文体」と指摘しているが、私はこの指摘を、決して素人は真似をしてはいけない文と理解した。別な言い方をすれば、もし、この同人誌に、この文章が投稿されてきたとして、編集者としての私は、それをきちんと評価できるだろうか、つまり、主語・述語の関係、主節・従属節の関係が乱れているのではないかと受け止め、ノーベル文学賞受賞者と知らなければ、執筆者に修正を迫るのではないか、いや絶対に迫ってしまうだろうと、怖くなった次第である。

これが日本語の特性を生かした、主語を省いた文章というのなら、欧米の文章には、どのように訳されているのか気になって、サイデンステッカーによる英訳を見てみた。

A shower swept toward me from the foot of the mountain, touching the cedar forests white, as the road began to wind up into the pass.

中条氏によれば、この一文の中で、「三つの運動が同時に起こっている」とのことである。要約すれば、第一は、傍線①の部分で、峠に通じる道についての客観的な描写、第二は②で、「いよいよ」とある通り、ここは主人公の気持ちや行動についての描写、③は、雨の動きについての描写ということである。

中条氏のこの指摘を下敷きにして、この部分を私なりに解釈してみた。

抜き書き部全体を一文と見れば、主節は③で、その主語は「雨脚」、述語は「追つてきた」である。では①と②はどう考えたらいいのだろう。主節に対する従属節ということなら、②がそれに該当する。「（私が）天城峠に近づいたと思ふ頃（に）」とすれば、意味は通る。では、①はどう考えたらいいのだろう。①は、主節③の従属節にはなっていないし、このままでは②にもつながらない。敢えてつなげるなら「つづら折りになっている道を、私が天城峠まで登つてくると」ということになるだろうが、これでは味も素っ気もない文になる。

一見、①の部分は宙ざりんのように見えるが、「こ」は「道がつづら折りになつていた」と完結した文として読むのが適切なような気がする。それを受けて②は、意味とし

主節の主語は「驟雨《shower》」、述語は「追ってきた《swept》」で、それに「私に向かつて」「麓から」「林を白く染めて」という補語が続いている。従属節を直訳すれば、「道が峠に向かつて曲がりはじめたところに」ということになろうか。スッキリしていると言えそうですがもしれないが、この中には原文の「いよいよ・近づいたと思ふ」に該当する言葉はない。峠まで続く道の客観的描写のみで、そこまでやっとの思いで登って来た「私」の思いは入っていないように見える。

気になるので、仏訳 (Le Livre de poche 1973) も調べてみた。

Le sentier décrivait tant de lacets que je pensais atteindre bientôt le col du mont Amagi. Je voyais approcher l'averse qui blanchissait le bois épais de cryptomérias et qui me pourchassait depuis le pied de la montagne avec une vitesse terrifiante.

英訳との違いは明らかで、こちらは二つの文章から成っ

せるところに視点を定め、そこから見えたであろう情景を想像して書いたのに違いないと思うにいたったのである。

吉永小百合主演の冒頭のシーンも、見晴らしのいい峠の茶店に駆け込んでくる「私」という設定になっていて、あれだったら文章通り、麓から追ってくる雨の様子がよく見えたとと思うが、これは、小説の冒頭の文章を生かすために、見晴らしのよい所に茶店を置いたのであり、実際は違うのではないかと思うのである。

実際に茶店がどの辺りにあったのか、確認は出来なかったが、小説を読む限り、茶店から一町(百餘強)ほどの所に隧道があることになっている。しかしながら、隧道から百餘ほどの所は、まさに密林の中で、そこから麓の方を見渡すことはできないと思うのである。

このことを連れの家に話すと、「今は、新緑の季節だけど、秋だったら、葉が落ちていて見通しが利いたのではないの?」と、川端の肩を持つようなことを言うのだが、たとえ落葉していても、杉の密林を白く染めながら追ってくる雨脚が見えるような地形ではないように思うのである。今から百年ほど前のことなので、木々が今ほどには育っていないかったということも考えられるが、「雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじいはやさで麓から私を追って

ている。第一の文は、「道がつづら折りになっていて、私は間もなく天城峠に到達するだろうと思った」であり、第二の文は、「私は、驟雨が近づくのを見ていたのだが、その驟雨は杉の密林を白く染め、ものすごい速さで、私を山の麓から追ってきた」である。

二文ということは、先に、「①の部分は(中略)完結した文として読むのが適切なような気がする」と述べたが、あながち間違いはなかったようである。また英文では省かれていた「私」の思いは、第一の文の《*objet*》(やがて、間もなく)に反映されているのだろうと考えた。

天城隧道までの旧道をたどりながら、これがあのつづら折りの道なのだ、何度も、自分に言い聞かせてきたの言うまでもないが、次第に違和感を覚えるようになってきた。それは、「雨脚が杉の密林を白くそめながら・・・」の件に関してである。私があどっているつづら折りの道は、新緑の五月ということもあって、うっそうとした緑の樹林に囲まれており、川端の文章にあるように、雨が密林を白く染めて追ってくるのが、本当に見えたのだろうかという違和感である。川端は、実際に密林を白く染める雨を見て、それを作品に取り入れたのではなく、麓から峠までを見渡

きた」というのは、見晴らしのいい所から遠望しているようなシーンであり、密林の中にいる人の視点ではないということが、そこまで行ってみてはじめて分かるのである。

話は少し横道に逸れるが、この後、原文は「私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき・・・朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった」と続いているが、踊子(吉永小百合)を追ってきた私(高橋英樹)は、学生服を着ていた。袴に朴歯の高下駄では、山道は歩き難いだろうという配慮からと思ったが、山口百恵のときには、三浦友和は紺緋の着物に袴をつけ、下駄をはいていた。細かい所に作り手それぞれのこだわりがあるのだろう。

細かい点と言えば、サイデンステッカー訳では、「私は二十歳」のところを「I was nineteen」と、数え年を満年齢に直して訳しているが、仏訳は、「J'avais vingt ans」として、「二十歳」のままである。

細かい点ついでにもう一つ。今回手に入れた仏語訳のなかに、明らかな誤りを見つけてしまったのである。第四章の冒頭で、「踊子」と「私」が、前の晩に泊まった宿を発つ場面について、Yugashima を発つとなっているのだが、前の晩、主人公たちが泊まったのは、私たちが泊まった湯

ヶ野だったはずである。仏訳も、数ページ前で、湯ヶ島を発つたのは、前日の午前八時だった、と正しく訳している。ここは、地名の一部が共通する故の勘違い、つまり「野」と「島」の混同と思うが、訳者に、日本人と思われる人名が二名もあがっており、手抜きというか詰めが甘かったというか・・・さて、前号の岩波書店に次いで、今度はフランスの出版社に誤りを指摘することになるのかもしれないが、その前に、そのところを仏文でどう説明するかという厄介な問題をクリアしなければならない・・・

差別用語について

「現代日本文学大系52・川端康成集」（筑摩書房）の附録に、文芸評論家・長谷川泉氏の「『伊豆の踊子』論」が収録されている。この大系で、「伊豆の踊子」の本文が十三ページなのに対し、「『伊豆の踊子』論」は、およそ四十五ページ、しかも本家が二段組みなのに対して、「論」の方は三段組みであり、そのボリュームからも、この小説の重要さがうかがい知れるところである。

踊子論は、「伊豆の踊子」の原型になったと言われている「湯ヶ島での思ひ出」や執筆の動機となったと思われる女性の存在にまで言及する、「踊子」の徹底研究とも言えない。冒頭部分の仏訳を見たついでに、この部分の仏訳も見てみた。「手を入ると濁る」の部分は、客観的な描写だから、「水が乱れる、濁る」と訳せる言葉が使われていて、特に違和感はない。しかし、「女の後は汚い」の方は、難しい言い回しなのだろうと思った。直訳すれば、「女性がひとたび飲んだ後は、水源がけがされる」という意味の仏文になっている。辞書を見ると、そこで使われていた「けがす」《souiller》の用例として、「服をインクで汚す」「細菌で汚染される」「神殿をけがす」等の文が例示されている。最後の使用例が一番近いものと思われるが、外国人にはもちろんのこと、今の多くの日本人にも、「なぜ女の後」なのか？という疑問が出てきてしかるべき所と思うのである。

長谷川氏の指摘する、茶店の老婆の一言は、先に触れた「物乞ひ旅芸人村に入るべからず」と同じ意識の有り様を示していると考えられるが、踊子の母親が発した女性を蔑むような一言も、同じ差別意識の現れと考えられるのである。長谷川氏が指摘する「汚濁」と私が授業で学んだ「不

る大作と思えるのだが、その「論」の中に、一つ、腑に落ちないところがあった。

峠の茶店の老婆と「私」との間で、「あの芸人は今夜どこで泊まるんでせう。」「あんな者、どこで泊まるやら分かるものでございますか、旦那様。お客があればあり次第どこにだって泊まるんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」というやり取りがある。この、旅芸人を侮辱する老婆の言葉について長谷川氏は、「清純さで洗われたような『伊豆の踊子』のなかの汚濁の部分である。そして、『伊豆の踊子』のなかには、汚濁の部分は一箇所しかない。」としているのだが、私には、もう一箇所あるように思えてならないのである。それは、湯ヶ野を出て、だいぶ下田に近づいたと思う頃、道端の泉で喉を潤そうとする「私」に向かって、踊子の母親がこう言うのである。

さあお先にお飲みなさいまし。手を入ると濁るし、女の後には汚いだらうと思つて。

私がこの部分のことを覚えているのは、自分で気づいたからではない。踊子の時代には、まだまだ「女は不浄」と「浄」とは、別のものということなのだろうか。つまり、長谷川氏の時代（「論」は、昭和四十年の執筆となつている）には、「女は不浄」という考え方を問題にすることはなかった、ということなのだろうか。

もう一つの「伊豆の踊子」

「伊豆の踊子」をはじめ読んで読んだのは、高校の国語の教科書だったと述べたが、実は、「踊子」の存在については、それよりもかなり前から知っていたのだということ、当該の教科書を読んで気づいたのであった。

私が小学生の頃、それは昭和三十年代の前半ということになるが、わが家では、毎日ラジオがつけっぱなし状態になっていた。母が、縫い物や編み物（それは、家族用ということもあったが、近所の人から頼まれた内職仕事のことが大抵だった）をしながら、聞いていたからである。当時は、昭和歌謡の全盛期で、三橋美智也、美空ひばり、春日八郎、フランク永井など、今日では、昭和の懐メロ番組でお目にかかるような歌手たちの歌を、まさにリアルタイムで聞いていたのである。彼らの歌った多くの歌を、今でも空で歌えるのは、私の記憶力が良いからではなく、まだテレビという映像媒体が普及していなかった時代のことなの

で、作詞家・作曲家そして歌い手も、言葉を大事にして歌を世に送り出していたからだろうと思う。もちろん、聞き手の側にも、耳を澄まして歌詞を聞き取ることが求められていた。歌の内容を理解するには、言葉しか頼れるものはないからである。もう少し現実的な話をするなら、レコードを買えば歌詞はついてきたが、レコードをかける蓄音機は容易に手に入るものではなかったのである。

そうした歌詞を聞かせる歌の一曲に、三浦洗一が歌った「踊子」があった。「天城峠で会った日は・・・月のきれいな伊豆の宿・・・」という歌詞を聴けば、今なら、間違いない「伊豆の踊子」に想到できるが、まだ小説も読んでいないし映画も見えない小学生には、何が歌われているのかすぐには理解できなかった。

映像の助けもなく、ラジオだけで理解していた時代なので、誤解もあった。「踊子」の一節に「下田街道、海を見て・・・」とあるのだが、当時、私は京王線の府中に近い所に住んでいて、京王線沿線には「下高井戸」という駅があつて（今でもある）、どうして、「シモタカイド」で海が見えるのかと、トンチンカンな疑問を抱いたことを覚えている。

この稿の執筆を機に調べてみると、三浦洗一の「踊子」

いたのである。だから、高校生になってはじめて小説を読んだときに、長年の謎が解けたような、不思議な感覚を覚えたのだ。吉永小百合の踊子が封切られたのは、ちょうどこの頃のことだった。その前の踊子が美空ひばりかと思っていたら鰐淵晴子だったということは、「伊豆近代文学博物館」の展示で知った。そして、吉永小百合の次が山口百恵かと思っていたら、その間に内藤洋子が入っていた。インターネットを使つて、今では簡単に三浦洗一の「踊子」を聞くことができる。歌詞も出ているので、「下田街道」を間違えることもない。三浦洗一の様子から、ネットの映像は昭和四十年代か五十年代のものと思われるが、一言一言を大事にした端正な歌い方は、その歌詞内容と相まって、清々しい。

そして、天城越え

石川さゆりの「天城越え」をはじめ聞いていたとき、三浦洗一の「踊子」の二の舞を踏んではいけないと思つたからではないが、今度は、松本清張の作品が歌謡曲になったのか、と思つたのだ。「天城越え」というタイトルが、清張の小説のタイトルと全く同じである上に、歌詞に「・・・あなたを殺していいですか・・・」と、殺人をほのめ

が発表されたのは、昭和三二年（一九五七年）、私が九歳のときである。九歳の子どもが、三浦だの三浦だのというとき、もう少し子どもらしい楽しみはなかったのかと言われそうだが、今の子どもたちがテレビアニメの主題歌に親しむのと同じく変わりはないのだと思う。まだまだテレビは高嶺の花だった。一節によれば、我が国のテレビの普及には、先日退位された平成天皇（当時皇太子）のご成婚が大きなきっかけとなつたとのこと、それは、昭和三年のことだった。

つまり、三十年代前半は、まだまだラジオ全盛時代だったということである。「鐘の鳴る丘」や「新諸国物語」笛吹き童子や紅孔雀」は、私よりも少し年齢の上の人たちの守備範囲だったと思う。私は、夕方のラジオで放送されていた、江戸川乱歩の「少年探偵団」が好きで、「ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団。勇気りんりん、るりの色。望みに燃える呼び声は朝焼け空にこだまする。ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団・・・」と、「りんりん」の意味も「るり」の意味もよく分からないまま、大声を張り上げて歌っていて、今でもここに書いた通り空で歌うことができるのである。

ああ、「踊子」から随分と脱線してしまった。ともかく私は、小説を読むよりずっと前から、踊子の存在は知ってかすような一節があつたからだ。妖艶な女が出てくる推理小説で、確かに人が一人殺されたが、歌謡曲の題材になるような内容だったろうかと疑問が湧き、読み直したのだ。

清張の「天城越え」は、中・短編集「黒い画集」に収められていて、現在では新潮文庫で読むことができるが、私をはじめ読んで読んだのは光文社のカッパ・ノベルスだった。「黒い画集」は、数ある清張の中・短編集の中でも最上級のものと思つている。その中で印象に残っているものをあげるとしたら、まずは「遭難」だろうか。学生時代、山登りに明け暮れていたこともあり、登場人物たちの愛憎描写よりも山行の描写に興味を覚え、何度か読み返した覚えがある。「坂道の家」も忘れがたい作品である。実直だった男が、ふとしたことをきっかけに身を持ち崩していく展開は、非日常的な謎解きとは全く逆で、犯罪が極めて身近に存在するという感じさせられた作品だった。

清張の「天城越え」が発表されたのは昭和三十四年のことである。小説は、昭和三十年代のはじめ頃、印刷業を営む男のところへ、老刑事が印刷物を依頼に来たことをきっかけに、昔のことが思い出されるという筋立てで、印刷業の男は、刑事来訪の三十年ほど前（大正十五年）に、天

城峠を越えたという設定である。ちなみに、川端が天城峠を越えたのは大正七年、「伊豆の踊子」の刊行は大正十五年のことであった。

「天城越え」は、下田に住んでいた鍛冶屋の少年（今で言えば中学校を出た位の年齢だった）が怪しげな人物と前になり後になりして峠を越える際に事件が起きるとい話だが、峠越えのシーンよりも、結末が印象的な作品だった。老刑事が訪れなければ、事件は誰にも知られずに埋もれていくはずだった。しかし記憶には時効はないと言わんばかりに、忘れかけていた遠い過去の出来事が、執拗な追跡者の手によって掘り返されるのである。主人公は、誰も知らないはずの自分の過去を知っている者がいるという、重く暗い思いを胸に生きて行かなければならなかった。犯人が捕まって、めでたしめでたしというのではなく、最後になって事件が始まったような、読者の心に重いものを残して終わるところが、清張的と言えれば清張的である。

天城峠で道に迷ってしまったような文章になったが、要するに、石川さゆりの「天城越え」は、清張の世界を歌ったものではなかったということである。この歌は、作詞家と作曲家が、川端と同じ湯ヶ島にこもって（宿は川端とは

別だったようだが）作り上げたということだ。女の情念を歌ったもので、清張の事件とは無縁のもの、浄連の滝、寒天橋、天城隧道と、お馴染みの地名が出てきて、この風土や歴史にインスピレーションを得て出来上がった作品なのかもしれないが、舞台は必ずしもここでなければならなかったというものではないような気がする。

繰り返しになるが、私にとって「天城越え」と言えば、石川さゆりではなく松本清張なのである。だから「文学博物館」で会った旧知の先生に、「ここには、川端、井上はあるけれど、清張の『せ』の字もないが・・・」と不満を漏らしたのである。すると、さすがに文学の専門家、「でも、清張はここで生活していたわけではないので・・・」と、あっさり切り替えされてしまった。そして、「この裏に、井上靖の旧住居が移設されているので、それをご覧になったら・・・」と勧められ、行ってみたのである。そこでは、彼が引率してきた中学生たちが家中を占領して、なにやら必至にメモを取っている様子なので、建物の中には入らず、玄関から中を覗いただけで、そこを後にして、天城隧道に向うことにしたのだった。

小説・私の峠越え

「私は、いつも下田から頂上を眺めている天城の山を自分の足で越えるかと思うとうれしくなった。この山を向こうに越えたら、自分の自由な天地がひろびろと広がっているように思えた。」

「天城越え」の少年が、峠を目指したときの心情である。確かに峠には、その先にどんな世界が広がっているのだろうといった期待をそそるようなイメージがある。学生時代に親しんだ山登りでも、峠越えには、山頂に立ったときは違った、独特の味わいがあった。

本格的な山登りを持ち出すまでもなく、身近にも、知らず知らずのうちに越えている面白そうな峠がいくつもあちよつと車を走らせてみようか？

わが家から一番近いのは、国道十六号線を神奈川県側から東京都側に入つてすぐの所にある御殿（ごてん）峠である。今では、バイパスが出来ているので、八王子へ出るのに、旧道を使うことは少なくなった。今、旧道と書いたが、我々が普段通っている御殿峠は、国道十六号線が整備されたときに名づけられたもので比較的新しく、本来の御殿峠は、少し山の中に入った所を通る古道にあつたという。峠は、単に人々が行き交つたというだけでなく、国境でも

あつたことから、紛争の地でもあつた。御殿峠の近くには、紛争処理（？）のための、磔の刑が行われた獄門場跡があると聞く。名前からして、何か出てきそうだが、心霊現象が見られるといった話は、まだ聞いていない。

国道十六号線をそのまま進んで、八王子で国道二十号線（甲州街道）に入つて西に向かうと、高尾山の中腹を巻くようにして大垂水（おおたるみ）峠がある（同じ音の峠が山梨県の山の中にあるが、そちらは大弛峠と表記する）。今では、高尾越えには中央高速の小仏トンネルを利用することが一般的で、甲府方面に行く際にこの峠を利用する人は少なくなった。

昔、山梨県にある大学の非常勤講師をしていたとき、時間のかかることは承知で、というより、時間をかけて楽しむために、この峠を通つて帰つて来たことが何度もある。相模湖側からの登りは、天城峠の「つづら折り」に勝るとも劣らない七曲がりだ、特に、マニュアル車に乗っていた頃は、かなり楽しいドライブができたものである。

甲州街道をさらに下り、大月で左折すれば富士山を目指すことになるが、そちらには向かわず二十号線をそのまま進むと、この街道最大の難所、笹子峠にさしかかる。私は、これより先に行くときには、中央高速を利用してしまふの

で、峠越えの経験はない。

この笹子峠には、中央高速の笹子トンネル（二〇一二年に天井版の崩落事故があった）の他に国道と県道に一つずつ、それにJRの鉄道トンネルが一つと、全部で四ヶ所にトンネルがある・・・という事は、ここは本州中央部と東京を結ぶ交通の要所ということになるのだろう。

山梨の人たちは、県内を甲府盆地を中心とした国中（くになか）と富士山麓に近い郡内（ぐんない）の二つに分けて考えることがあるが、笹子峠はまさにその分割点の象徴ということになる。中央高速を走っていて、笹子トンネルのこちら側と向こう側とで天気が違うということは何度も経験してきたので、ここを境に二つに分けるとするのは、合理的なことなのかもしれない。

甲州街道は、大月の先、JR中央線の笹子駅を過ぎた辺りで二手に分かれる。右が現在の甲州街道で、その先の新笹子隧道（約3km）を抜ければ、甲府盆地すなわち国中である。左は、現在は県道となっているが、新笹子隧道が出来るまでは、こちらがれっきとした甲州街道で、つづら折りをかなり上った所に、笹子隧道がある。中央高速の笹子トンネルと甲州街道の新笹子隧道が数キロメートルあるのに対して、この隧道は約二五〇メートルとかなり短い。長さ

を節約するためには、かなりの高所を掘らなければならなかったということなのだろう。

笹子隧道は文化財に指定されているということである。まだ、写真でしか見えないが、時代を感じさせるレンガ製の外壁は、なぜこのような山の中に、こんなにもモダンなトンネルが・・・と思いたくなるような佇まいだ。また、トンネルのこちら側から撮った写真には、向こう側の出口がぼんやりと明るく見えていて、思わず天城隧道を連想してしまう。ネットには、ここには少女の霊が出るということとで、心霊スポットとして注目されていると出ている。時代を感じさせる様子から、踊子が天城峠と間違えてお出ましになっていると言われると信じてしまいたいそうになるが、こちらは昭和に入ってから完成なので、踊子が出ることはないだろう。

甲府盆地を抜け、国道二十号線をさらに下ると（途中の山中には、いくつもの気になる峠があるが、割愛する）、諏訪から国道十九号線となって、やがて松本に至る。そこから飛騨との国境、安房（あぼう）峠を目指す。近年（といっても、長野オリンピックに間に合わせたということだから、二十年以上も前になる）、この峠の下をぶち抜く安房トンネルが出来て、飛騨側との通行が随分と便利になっ

たと聞くが、私はまだ利用したことはない。

安房トンネルの手前で右に道を取ると、上高地への表の玄関口、釜トンネルである。ここも、笹子隧道に劣らない風格ある隧道である。

ここは、自家用車での通行は禁止されているので、バスを使うことになる。冬山のシーズンになると、バスも通らなくなるので、入山者は歩いて通り抜けるしかない。

冬山では、雪崩、滑落、凍死など山岳事故がたびたび起きる。そういう状況にあるからだろう、山小屋の親父たちの中には、そのテの話し、つまりこの世のものでない人たちの話しを得意にする人が結構いた。釜トンネルは、紅葉の季節には、かなりの人出と聞くが、オフシーズンともなれば、笹子隧道以上に寂しいところになるので、そうした話しにはうつつつけの舞台のようだ。ここをさまよう人たちの話は、どこかの山小屋で聞いたこともあるし、山岳雑誌で読んだこともある。

たとえば、こんな話である。

雪道を歩いてきてトンネルに入ると、前方に行くパーテイーが見えるので心強く思い、追いついて声をかけようと急ぎ足で近づいて行くと、トンネルを出たところで、姿は見えなくなり足跡もついていないとか、数人の仲間とトン

ネルの中を歩いていると、自分たちとは違った足音が響いてくるような気がするので、止まって確かめようとすると、相変わらず足音は響いてくるが、誰も近づいて来ない・・・

・ そうですね、前の年、ここから入山して、帰って来なくなつた大学生のパーティーがあつた・・・。

大学二年の秋、バスで上高地に入り、さらに二、三時間ほど奥に入った所で合宿をしたときのことである。私は、親類の法事があつて、仲間たちより一日早く帰らなければならなかつた。上高地からバスを利用すれば楽に帰れることは分かっていたが、天気は良さそうだし、その日のうちに、正確に言えば、翌日の朝までに帰っていけばいいということだったので、上高地の手前で左手に入り、峠を越えて、松本電鉄の新島々（しんしましま）駅まで歩くことにしたのだつた。峠の名前は徳本（とくごう）峠、釜トンネルが掘られる前は、ここが上高地への表玄関だつた。

梓川の畔からは二時間程度の登りだつた。峠には山小屋があり、何人かの人たちが、出たり入ったりしていた。声をかけてみると、私より先に上高地から登って来たらしく、穂高連峰を写真に撮り、昼食を済ませたら、新島々の方には下りず、上高地に戻り、バスで帰るとのことだつた。

新島々への下りには四、五時間かかるが、松本からは夜

行列車を利用することになるので、時間的には余裕があった。しかしながら、峠を出ようとする頃、雲行きが怪しくなってきたので、急がなければと思ったのだった。

急斜面からややなだらかな下りになる辺りで雨が落ちてきたかと思うと、じきに本降りになってきた。簡単な雨具では心許なくなってきたので、途中の、廃屋のような山小屋の軒を借りて本格装備をして下山を再開したのだった。

再び下りはじめてしばらくしたところで、これから峠を目指すらしいパーティに出会った。脇に避けて道を譲ったのだが、うつむき加減に黙々と歩を進めるその姿に、今一つなじめないものを感じたのだった。装備から、山登りに馴れた人たちのように見えたのだが、どことなく場違いのような印象を受けたのだった。重い足取りで進むその姿が、敗残兵のように見えたからだろうか。

この道を上高地への入山に使う人がいるということへの驚きもあつたが、新島々からやって来たとするなら、歩きはじめて、まだそれほどたつてはいないはずなのに、ずいぶんと疲れているように見えたのも意外なことだった。それに、後になって気づいたことだが、彼らの表情を思い出すことができないのも不思議だった。すれ違ったのは一瞬のことで、特に言葉を交わしたわけでもなく、辺りは薄暗

くて、表情がよく見えなかったということもあるが、顔全体が暗い闇の底に沈んでいるような感じだったのである。この道は、私が思うほど使われていないわけではないのかもしれないと思つたのは、間もなく、峠を目指すもう一隊に出会ったからである。

「徳本泊まりですか？」と、声をかけると、

「ええ。出るのが遅くなつてしまつたので、しかもこんな天気で、今日中に着けるかどうか・・・途中でビバーク、遭難はイヤだなあ」と、冗談めかした返事が返つてきた。

「今し方、登つて行つたパーティがあつたけれど、同じ電車だったのでしょうか？随分とスローペースだったので、すぐに追いつくのでは・・・」と言うと、三人は怪訝な顔をして、互いの顔を見合わせたのだった。自分たち以外に同じ列車から降りて徳本を目指す人はいなかったというのである。

「どんなパーティだった？」と聞かれたので、

「顔は良く見えなかつたけれど・・・かなりの荷物だったから、何泊かするのではないか」と答えたのである。

「この近くでテントでも張つていたのだろうか」と一人がつぶやくと、

「この辺でテントを張つていたら、もっと早くに登り始め

ているだろう。」と別の一人が応じ、さらに「それは何人のパーティだったか？」と聞くので、

「四人だった」と答えたのだった。すると、

「四人ということは、怪しいなあ・・・」と言いながら、手で妙なゼスチャーをしたのだった。

「止めてくれよ、こちらから登るんだろ」と、どこからか声があがり、三人は笑い出したのだが、私は、事情が分からずきよとんとしていたのだった。

彼らが言うには、数年前の秋に季節外れの大雪が降り、峠の直下で雪崩があつて、四人がのみ込まれる事故があつた。それ以来、よく似た四人組が、この峠を登つたり下つたりするのを見かけるようになったという噂があるというのである。

私が会つたパーティはどんな様子だったかと聞くので、しつかりとした装備をしていた。冬山に向けての雪上訓練でもするのだろうと思つた、ピッケルとかんじきをザックにくくりつけていたから・・・と告げたのである。

すると、リーダーらしい男が、「やっぱり怪しい、今の時期、まだ訓練に足りるような雪は降らないだろう。ピッケルはともかく、かんじきはかなりの深雪を想定しての装備だから、アレだったのではないか？」というのである。

四人とすれ違った後に感じていた違和感は、厳冬期でもないのに、かんじきをつけていたことに起因していたのかもしれない。つまり、私が会つたのはやはりアレだったのだろうか・・・。

川端康成には、今回取り上げた伊豆の他に、鎌倉、越後湯沢、京都・・・と、散歩してみたくなる土地を舞台にした作品がいくつもある。その手はじめにと伊豆・天城峠まで出かけてみたのだが、他まで手が回らなくなつてしまつた。今回出来なかつた散歩については、改めて作品を読み、考えてみようと思う。

参考文献

現代日本文学大系52 川端康成集 筑摩書房 一九六八年

英和対照 伊豆の踊子 原書房 一九七三年

La Danseuse d'Izu Yasunari Kawabata Le livre de Poche 1973

小説の解剖学 中条省平 ちくま文庫 二〇〇二年